



パリ・ポン
ヌ

えと文

八木 蓉子

ポン・マリーを描いて

パリジャンがパリを愛すること、日本人の想像を絶するものがある。そのパリジャンたちがとくに心のふるさとのように考えているのがセーヌ川の中之島ともいうべきシテ島付近だ。パリの町はこのシテ島から始まったと言われるだけあって、このあたりには古いパリの名残りが沢山ある。ノートルダム寺院、ローマ帝国占領時代の遺跡、古い地下牢のあとなど。この陰惨な地下牢跡は今ではシャンソン酒場になり、昔の衣裳をつけた歌手たちが古いシャンソンを歌い、お客がこれに唱和する、夜のパリの一名所となっている。それからルーヴル美術館もシテ島の少し下流の対岸にある。このシテ島のいかめしい警視庁の建物の前には、花の常設市場があり、またここでは毎日曜日ごとに小島の市が立つ。

このあたりのセーヌ川にかかる橋、ポン・ヌフ、ポン・マリーなど、昔からいくたりの画家によって描かれたことだろうか。そして今日でもこの辺に画架を立てる人の姿は絶えないのである。

(昭三一大政卒・画家)